

## 2 普通畑作物及び工芸作物

|                    |     |
|--------------------|-----|
| 畑作物の土づくりと施肥法 ..... | 143 |
| 桑園の土づくりと施肥法 .....  | 148 |
| 施肥基準               |     |
| 陸稲 .....           | 149 |
| 小麦 .....           | 150 |
| 大麦 .....           | 153 |
| さつまいも .....        | 154 |
| ばれいしょ .....        | 156 |
| 大豆 .....           | 157 |
| 落花生 .....          | 158 |
| ゆで落花生 .....        | 160 |
| そば .....           | 162 |
| 茶 .....            | 163 |
| 葉たばこ .....         | 165 |
| 桑園 .....           | 166 |

## 畑作物の土づくりと施肥法

畑作物において、石灰資材を連用した結果pHが高くなっているほ場が見受けられるなど、経年的に同様な管理を続けたことにより、土壌の化学性が適正な範囲から逸脱している場合が見受けられる。そのため「3 土壌診断と土壌管理」に示したように、客観的なデータに基づく管理が必要である。一部の普通畑においては、養分含有量が低下する傾向があることが指摘されているので、土壌診断を行い、その結果に基づいて適正な施肥と量の堆肥施用や、緑肥の導入による有機物の補給などを積極的に行うことが必要である。

畑作物の中でも、ここでは主要作物である麦類、さつまいも、大豆及び落花生について述べる。

### (1) 麦類

麦類は水稻に比べて施肥に頼る性質の強い作物である。第Ⅲ-2-1表に示すように、無肥料栽培の収量は三要素（標準）栽培の収量的水稻では70%であるのに対し、小麦及び大麦では33~40%である。このように、特に無窒素での収量が低く、窒素施用の影響が大きい。

小麦において、各種養分の要求度が高い生育時期別を模式的に第Ⅲ-2-1図に示した。窒素は全期間を通して必要で、特に幼穂分化期から出穂期にかけて要求度が高い。りん酸は分けつ期に、加里及びカルシウムは全期間を通して必要とされる。窒素は収量を支配する重要な養分であるので、施肥窒素が効率的に吸収される環境を作ることが大切である。加里は稈の細胞組織を強化し、倒伏を軽減する作用があり、欠乏すると耐寒性が低下する。大麦では、小麦に比べて土壌の酸性やりん酸欠乏に対する抵抗力が弱く、マンガンの欠乏症状も発現しやすい。

#### ア 肥培管理

麦類は、一般に輪作作物としての栽培が多いため、前作物の種類によって窒素施用量を増減させる必要がある。野菜跡地では肥料の残存量が多いため、基肥を30~50%減らすか、無肥料とし、生育に応じて追肥を行うこととする。

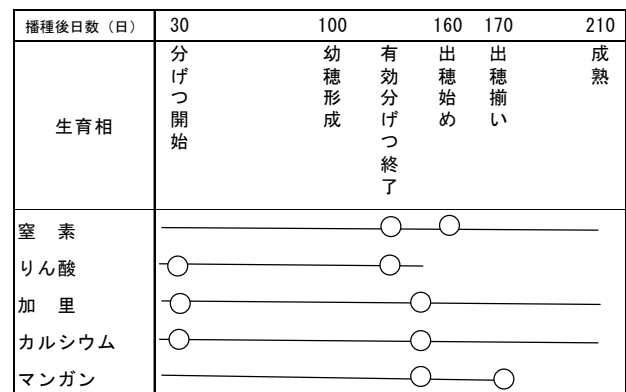
また、栽培方法によっても基肥の施用量は異なり、慣行の条播栽培に比べてドリル播栽培では30~50%増、全面全層播栽培では50%増~倍量とする。

追肥は収量及び品質向上のために重要な技術であり、3月上~中旬の茎立ち期（幼穂長1mm前後）の窒素施用は穂数及び穂長を増大させる効果がある。

転換畑では、地力窒素の発現量が転換初年目では多く、転換年数が長くなるにつれて減少する。したがって、初年目は基肥とともに追肥も窒素施用をひかえ、2年目以降は追肥として窒素4kg/10a程度を施用する。特に転換畑の小麦では、出穂期以降の窒素不足が生じると子実のたん白質含有率がめん用の適正範囲（10~11%）より低くなることがある。この対策として、栄養成長が停止する出穂期以降に窒素2kg/10a程度の実肥を

第Ⅲ-2-1表 三要素試験における麦類の収量比<sup>1)</sup>

|     | 無肥料 | 三要素 | 無窒素 | 無りん酸 | 無加里 |
|-----|-----|-----|-----|------|-----|
| 水 稻 | 70  | 100 | 75  | 97   | 93  |
| 小 麦 | 33  | 100 | 46  | 69   | 72  |
| 大 麦 | 40  | 100 | 52  | 66   | 72  |



第Ⅲ-2-1図 小麦の生育時期別養分要求程度

施用することで倒伏させずにたん白質含有率を高める効果がある。

第Ⅲ-2-2図に示したように、出穂 10 日後の実肥としての窒素施用により子実のたん白質含有率は高まり、その効果は窒素追肥 1 kg/10a につき、平均してたん白質含有率約 0.5%増加する。なお、小麦のたん白質含有率は地域の土壌条件、気象（特に降水量）、収量レベルなどにより異なるため、実肥としての窒素の施用量についてはこれらを考慮して決定する。また、実肥施用により成熟期の 1～2 日遅れ、遅れ穂の発生、外観品質の低下などに留意する必要がある。

第Ⅲ-2-3図に示したように、出穂期の葉色値が 40（葉色計、SPAD）程度であれば、実肥を施用しなくても施用した場合と同等のたん白質含有率となる。

#### イ 土壌管理

麦類栽培において、堆肥は微量元素の供給や地力維持のために必要であり、完熟した堆肥を施用する。水田での稲—麦体系において稲わらをすき込む場合は、分解時に窒素が取り込まれるため、石灰窒素を窒素成分で 4～5 kg/10a 散布するとよい。

火山灰土では、熔りんなどのりん酸質肥料を施用して、りん酸の供給量を高めることが必要である。

麦類の生育に好適な土壌 pH は 6.0～6.5 であり、これ以下の場合には石灰質資材を施用して好適 pH に矯正する。

麦類は湿害を受けやすく、排水の悪い転換畑では発芽障害や生育抑制が起きる。特に生育後期に地下水位が高く、地表排水が悪い場合は根が呼吸障害を受け、収量の低下を招く。したがって、転換畑では、基盤整備等により暗きよを整備したほ場での栽培が望ましい。加えて、栽培前に明きよ、弾丸暗きよ、心土破碎などの営農排水対策を行い、できるだけ畑状態に近づけることが重要である。

#### (2) さつまいも

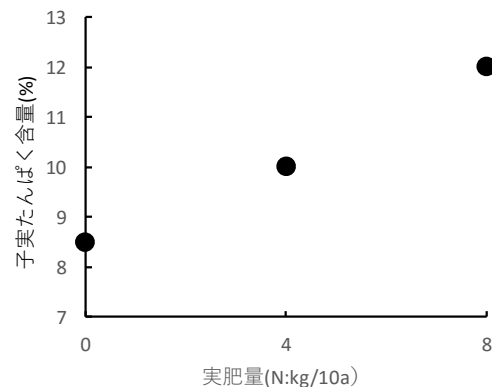
さつまいもでは窒素と加里の養分吸収量が特に多い。いも 1 トンを生産するのに必要な養分吸収量については、多くの報告があるが、品種や地域によって差がある。

千葉県「ベニアズマ」では、いも 1 トン当たり窒素 3.5kg、りん酸 1.2kg、加里 4.7kg が吸収される<sup>4)</sup>。このうち、いもに配分される割合は窒素と加里がともに約 60%で、茎葉がほ場に還元されても施用量に比べて吸収量が多いため、地力が消耗しやすい。

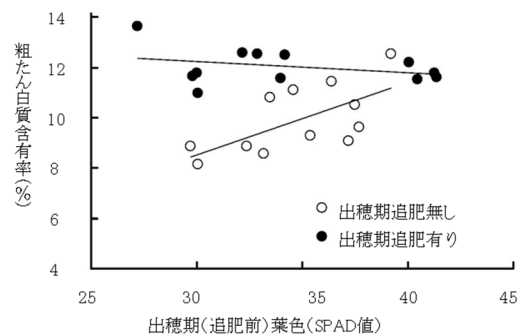
#### ア 肥培管理

さつまいもは、特に窒素に敏感に反応し、その吸収力が強い。適正とされる窒素施用量は品種によって異なるが、主要品種である「ベニアズマ」、「高系 14 号」、「べにはるか」がともに 3～5 kg/10a である。施用量が多過ぎると茎葉が過繁茂となり減収する。前作の肥料が残っている場合には、施用量を減らす。

りん酸の吸収量は少ないが、火山灰土では 10～12kg/10a 程度施用する必要がある。加里は吸収量が多いので、10kg/10a 程度施用する。なお、さつまいもの品質向上のため



第Ⅲ-2-2図 実肥の施用量と小麦たん白含量との関係<sup>2)</sup>



第Ⅲ-2-3図 実肥施用の有無別の出穂期の葉色と粗たん白質含有率との関係<sup>3)</sup>  
品種：「農林 61 号」

め、主産地では有機質肥料や米ぬかが施用されている事例が多い。

#### イ 土壌管理

さつまいもは、排水の良い畑を好む。また、吸肥力が強いことやせ地でもある程度の収量は得られるが、品質の良いものを生産するためには地力の向上が必要である。このため、有機物の施用や地力窒素を高めるような露地野菜などとの輪作体系が有効である。

さつまいも畑への堆肥施用は、さつまいもの過繁茂を避けるために基本的には前作時に行う。また、連作ほ場では完熟堆肥 500kg/10a 程度を植え付けの1ヶ月前までに施用する。なお、線虫対策で利用されるギニアグラスの青刈りすき込みも物理性の改善などの有機物施用の効果が期待される。

輪作体系では、地力窒素の補給と線虫害軽減をねらいとした落花生やさといもなどとの組み合わせが有効である。なお、野菜作のあとでは、耐肥性の弱い品種（「紅赤」など）の作付を避ける。

また、立枯病は土壌 pH が高い場合に発病するため、発病の見られるほ場では石灰質資材の施用をやめ、土壌 pH を 5.5~6.0 を目標に管理する。

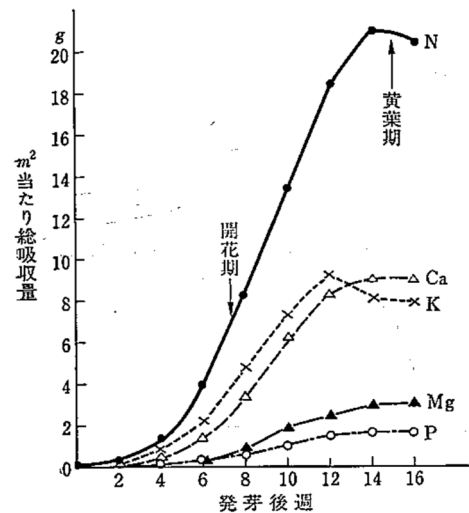
### (3) 大豆

大豆の生育は、発芽から開花期までは緩慢に進み、開花期から莢伸長期にかけて急激に旺盛となる。各養分の吸収経過は第Ⅲ-2-4 図に示したように、生育量と同様な傾向を示し、窒素の吸収量は黄葉期に最大となる。

養分吸収量と収量を、第Ⅲ-2-2 表に作物間で比較した。大豆 100kg 当たりの収穫部 100kg 当たりの養分吸収量は、水稻と比べて窒素、りん酸、加里、カルシウム、マグネシウムともに多い。このように大豆は多量の養分を吸収するが、なかでも窒素、カルシウム及びマグネシウムの吸収量が際立って多い。

窒素の供給源は、施肥窒素、地力窒素及び根粒固定窒素であり、大豆に吸収される窒素の割合は、それぞれ 5%、35~40%、50~60%程度とされ、地力窒素と根粒固定窒素の割合が高い。

りん酸は、吸収量が窒素に比べて少ないが、根粒菌の着生を促進する効果がある。また、生育や収量に対する影響も大きく、生育初期から開花期にかけて吸収させることが増収に結びつく。加里、カルシウム、マグネシウムなどの養分は、バランス良く吸収させることが大切である。



第Ⅲ-2-4 図 大豆における生育に伴う各養分の吸収量の推移<sup>5)</sup>

第Ⅲ-2-2 表 各作物の収量及び収穫部 100kg 当たり養分吸収量<sup>6)</sup> 抜粋

| 作物  | 乾物重収量<br>(kg/10a) | 収穫部 100kg (乾物) 当たり養分吸収量 (kg) |      |     |       |        |
|-----|-------------------|------------------------------|------|-----|-------|--------|
|     |                   | 窒素                           | りん酸  | 加里  | カルシウム | マグネシウム |
| 小麦  | 475               | 3.2                          | 0.53 | 2.9 | 0.42  | 0.23   |
| イネ  | 615               | 2.3                          | 0.52 | 3.2 | 0.56  | 0.29   |
| ダイズ | 261               | 8.5                          | 0.76 | 3.3 | 1.27  | 0.65   |

#### ア 肥培管理

大豆は根粒菌が固定する窒素を利用することができるので、窒素施用量は少なくてもよい。りん酸と加里は10kg/10a程度施用する。

なお、転換畑では転換1～2年目の乾土効果が高く、土壌からの窒素供給量が大きくなるため、基肥窒素は1～2kg/10aの施用でよいが、3年目以降は3kg/10a程度施用する。また、開花期以降は大豆の窒素吸収量が多くなるので、転換年数が長くなるなど、地力窒素の発現が少ない場合は、開花期の窒素追肥(4～5kg/10a)による増収効果が期待される。

#### イ 土壌管理

転換畑では、前述の小麦と同様にまず地表排水の改善と地下水位の低下を図り、できるだけ畑地状態に近づけることが重要である。

また、窒素の吸収量が多いことが増収に結びつくため、土壌肥沃度を高く維持して土壌からの窒素供給を多くするとともに、根粒菌の活性を高めるため堆肥の施用、麦稈のすき込み、りん酸質資材の施用などを行う。土壌pHは6.0～6.5を目標に管理する。

### (4) 落花生

落花生は、第Ⅲ-2-5図に示すように開花期から収穫期にかけて窒素の吸収量が増える。根粒菌と共生して固定窒素の影響を受けるので、窒素供給源としては根粒菌固定窒素及び地力窒素が多く、特に根粒菌固定窒素がおよそ70%を占める。このため、大豆と異なり追肥の効果は現れにくい。

りん酸は、登熟を促進して完熟莢を増加させる。加里は、莢数の増加や子実の充実に重要な役割を果たす。石灰は、莢表面や子房柄からも吸収され、子実を充実させる。欠乏すると子実の発育が阻害されて空莢の発生が増える。

#### ア 肥培管理

基肥窒素は、3kg/10aの施用が適正であり、それ以上は茎葉を徒長させて収量の低下を招く。りん酸と加里は、生育後期まで必要とされるので、それぞれ10kg/10a程度を施用する。

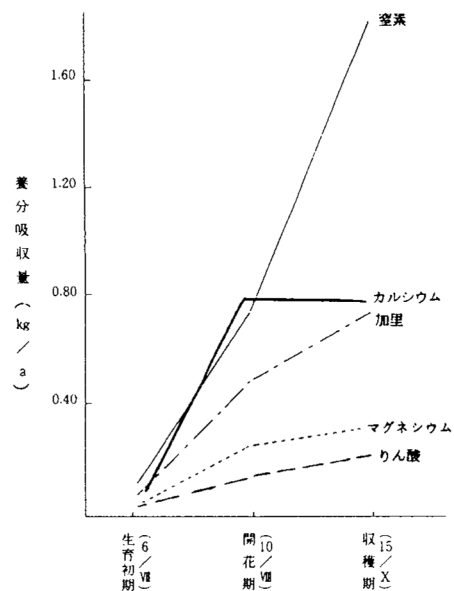
追肥は、火山灰土では不要であるが、砂質土では降雨により肥料成分が流亡しやすいため窒素と加里を施用する。この場合、窒素1kg/10a、加里2kg/10aを株元に施用するとよい。

品種別では「ナカテユタカ」、「郷の香」は肥沃地で多収を示すが、「千葉半立」、「千葉P114号」、「おおまさり」は窒素が多いと過繁茂になりやすいので野菜跡地などでは施用量を減らす。

#### イ 土壌管理

落花生は、窒素を多量に吸収するが、根粒菌による窒素供給が多いので、根粒菌の活性を高める土壌管理が大切である。そのため、堆肥の施用、麦稈の鋤き込み、土壌改良資材の施用などを行う。土壌pHは、6.0～6.5になるよう石灰質資材を用いて矯正する。また、土壌水分の不足は養分吸収を阻害するので、土壌の保水力を高めるために有機物を施用する。

一方、転換畑では排水対策を十分に行うことが大切である。施肥量は普通畑と同量とし、普通畑と同様に堆肥、麦稈などを施用して土壌肥沃度を高めることが増収につながる。



第Ⅲ-2-5図 落花生の養分吸収経過 (千葉農試)

引用文献

- 1) 植物栄養土壤肥料大辞典, 681, 養賢堂, 東京 (1976)
- 2) 高山敏之, 実肥による小麦子実蛋白含量の向上, 近畿中国地域における新技術, 中国農業試験場 33 号, 28-30 (1998)
- 3) 転換畑における小麦栽培, 11, 千葉県農林技術会議 (2008)
- 4) サツマイモ栽培技術指針, 18, 千葉県農林技術会議 (2001)
- 5) 農業技術大系作物編 6, 基 49, 農山漁村文化協会, 東京 (1976)
- 6) 農業技術大系作物編 4, 技 139, 農山漁村文化協会, 東京 (1976)

## 桑園の土づくりと施肥法

永年性木本植物の桑は、土壌に対する適応性が比較的広いとため、火山灰土だけでなく第三系粘質土や海成砂質土でも栽培されている。栽培されている桑樹の根系垂直分布は、根重、根長とも60%以上が土壌深40cm以内に分布しており、成園後には特に20~30cmの層位で分布密度が高く推移する。

桑園管理の基本は、土壌条件の改善を図るとともに桑栽培によって消費される土壌養分の適切な補給を図ることで、長期にわたり安定した生産を行うことにある。生産性を維持するためには、土壌環境の整備を含めて適切な栽培管理を行う必要がある。

### (1) 土づくり

稲わらを連用し標準的な施肥を行っている腐植質火山灰土桑園の場合、土壌炭素の年間消費量は稲わら換算で800kg/10a程度になることが知られている。炭素を5%含む標準的な腐植質火山灰土の桑園土壌には、深さ10cm当たり4t/10aの土壌炭素が含まれている。土壌炭素の消費率を年間3%とすると炭素120kg/10aが減少する。したがって、土壌有機物を維持するためには、稲わら換算で1t/10a程度の有機物を毎年施用する必要がある。

砂質土壌には、養分保持力を維持するためにも有機物の施用が不可欠である。さらに、有機物の施用によって物理性が改善されるばかりでなく、土壌中の生物多様性が増し緩衝能が増大するため、窒素や無機成分の養分供給力が向上してその利用率が高まると期待される。

### (2) 肥培管理

桑樹に吸収され桑葉・条としては場外に運び出される土壌養分のうち、天然供給量だけでは不足する成分を補給するために施肥が行われる。

標準繭120kg/10aを生産するために必要な条桑量は、普通植桑で2,800kgである。条桑を生産するために費やされる土壌中の窒素の総量は、普通植桑で24.5kgである。石灰窒素を3%加用した稲わらを連年1t/10a補給している桑園土壌からは、毎年平均して窒素7kgが供給される。桑樹における窒素成分の利用率は58%程度と推定されているので、施肥により補給する必要がある窒素量は普通植桑の場合30kgと考えられる。施肥効率は土壌条件や利用する資材によっても異なるので、家畜ふん堆肥などを活用する場合には肥料成分量を加味して施肥量を決める必要がある。



## 陸 稲

- 1 対象地域 北総地域、千葉中央地域  
 2 土 壌 火山灰土  
 3 栽植密度 播種量 慣行条播 4 kg/10a  
 4 目標収量 300kg/10a  
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型   | 月旬          |     |     |          |     |        |     |     |        |     |     |     |
|-------|-------------|-----|-----|----------|-----|--------|-----|-----|--------|-----|-----|-----|
|       | 1           | 2   | 3   | 4        | 5   | 6      | 7   | 8   | 9      | 10  | 11  | 12  |
|       | 上中下         | 上中下 | 上中下 | 上中下      | 上中下 | 上中下    | 上中下 | 上中下 | 上中下    | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
|       | ○ ○ ————— □ |     |     |          |     |        |     |     |        |     |     |     |
| 施肥    |             |     |     | ●        |     | ●      |     |     |        |     |     |     |
| 主要作業名 |             |     |     | 基播<br>肥種 |     | 追<br>肥 |     |     | 収<br>穫 |     |     |     |

### 6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 |               | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応   |
|------|---------------|----|-----|----|------|
| 基肥   | 4月中<br>～下旬    | 5  | 7   | 7  | 低度化成 |
| 追肥   | 6月下旬<br>～7月上旬 | 2  | —   | 2  | NK化成 |
| 計    |               | 7  | 7   | 9  |      |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH は 5.0～5.5 が適し、高いと生育不良となるため注意する。
- (7) 野菜跡地など残存窒素量の多いほ場では、窒素施用量を減らす。

## 小 麦 (普通畑)

- 1 対象地域 北総地域、千葉中央地域
- 2 土 壌 火山灰土
- 3 栽植密度 播種量 慣行条播 4kg/10a  
 ドリル播 6～8kg/10a  
 全面全層播 10～12kg/10a
- 4 目標収量 450kg/10a
- 5 栽培型と主な作業

| 月旬    | 10    | 11  | 12  | 1   | 2   | 3   | 4   | 5   | 6   | 7   | 8   | 9   |
|-------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|       | 上中下   | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| 品種    | さとのそら |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
| 施肥    | ●     |     |     |     |     | ●   |     |     |     |     |     |     |
| 主要作業名 | 基肥    | 播種  |     |     |     | 追肥  |     |     |     | 収穫  |     |     |

### 6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期  |          | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応   |
|-------|----------|----|-----|----|------|
| 慣行条播  | 基肥 10月下旬 | 5  | 10  | 8  | 低度化成 |
|       | 追肥 3月上旬  | 2  | —   | —  | 単肥   |
|       | 計        | 7  | 10  | 8  |      |
| ドリル播  | 基肥 10月下旬 | 8  | 15  | 12 | 低度化成 |
|       | 追肥 3月上旬  | 2  | —   | —  | 単肥   |
|       | 計        | 10 | 15  | 12 |      |
| 全面全層播 | 基肥 10月下旬 | 10 | 20  | 16 | 低度化成 |
|       | 追肥 3月上旬  | 2  | —   | —  | 単肥   |
|       | 計        | 12 | 20  | 16 |      |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 野菜跡地では、必要に応じて施肥量を 30～50%減らす。
- (7) 暖冬の年は、追肥を早めに施用する。
- (8) 土壌 pH を 6.0～6.5 に矯正する。





## 大 麦 (普通畑)

- 1 対象地域 北総地域、千葉中央地域
- 2 土 壌 火山灰土
- 3 栽植密度 播種量 慣行条播 4～5kg/10a  
 ドリル播 8～10kg/10a  
 全面全層播 12～15kg/10a
- 4 目標収量 500kg/10a
- 5 栽培型と主な作業

| 品種    | 月旬 | 10          | 11  | 12  | 1   | 2   | 3      | 4   | 5   | 6      | 7   | 8   | 9   |
|-------|----|-------------|-----|-----|-----|-----|--------|-----|-----|--------|-----|-----|-----|
|       |    | 上中下         | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下    | 上中下 | 上中下 | 上中下    | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| カシマムギ |    | ○ ○ ————— □ |     |     |     |     |        |     |     |        |     |     |     |
| 施肥    |    | ●           |     |     |     |     | ●      |     |     |        |     |     |     |
| 主要作業名 |    | 基播<br>肥種    |     |     |     |     | 追<br>肥 |     |     | 収<br>穫 |     |     |     |

### 6 施肥基準 (kg/10a)

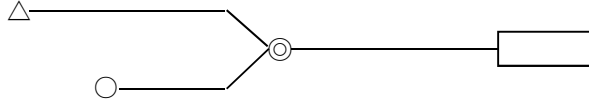
| 施用時期  |          | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応   |
|-------|----------|----|-----|----|------|
| 慣行条播  | 基肥 10月中旬 | 5  | 10  | 8  | 低度化成 |
|       | 追肥 3月上旬  | 2  | —   | —  | 単肥   |
|       | 計        | 7  | 10  | 8  |      |
| ドリル播  | 基肥 10月中旬 | 8  | 15  | 12 | 低度化成 |
|       | 追肥 3月上旬  | 2  | —   | —  | 単肥   |
|       | 計        | 10 | 15  | 12 |      |
| 全面全層播 | 基肥 10月中旬 | 10 | 20  | 16 | 低度化成 |
|       | 追肥 3月上旬  | 2  | —   | —  | 単肥   |
|       | 計        | 12 | 20  | 16 |      |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 野菜跡地では、必要に応じて基肥施用量を 30～50%減らす。
- (7) 暖冬の年は、追肥を早めに施用する。
- (8) 土壌 pH を 6.0～6.5 に矯正する。

## さつまいも（早掘り栽培）

- 1 対象地域 北総地域  
 2 土 壌 火山灰土  
 3 栽植密度 2,500～3,300本/10a  
 4 目標収量 1,800kg/10a  
 5 栽培型と主な作業

| 月旬    | 1   | 2        | 3       | 4              | 5   | 6   | 7   | 8    | 9     | 10  | 11  | 12  |
|-------|---|----------|---------|----------------|-----|-----|-----|------|-------|-----|-----|-----|
|       | 上中下   | 上中下      | 上中下     | 上中下            | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下  | 上中下   | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| 品種    | (ポット苗)<br><br>(種イモ) |          |         |                |     |     |     |      |       |     |     |     |
| 施肥    |   |          |         | ●              |     |     |     |      |       |     |     |     |
| 主要作業名 |   | ポット苗育苗開始 | 種イモ育苗開始 | 基肥・マルチ<br>土壌消毒 |     |     |     | 収穫始め | 収穫終わり |     |     |     |

## 6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 |      | 窒素  | りん酸 | 加里 | 対応        |
|------|------|-----|-----|----|-----------|
| 基肥   | 4月下旬 | 3～5 | 10  | 10 | 低度化成、有機配合 |
| 追肥   |      | —   | —   | —  |           |
| 計    |      | 3～5 | 10  | 10 |           |

## 7 施用上の留意事項

- 施肥の環境負荷を考慮する（32～44ページ、47～51ページ及び417～424ページ参照）。
- 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する（14ページ参照）。
- 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する（63～78ページ及び401～404ページ参照）。
- 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する（20～24ページ、52～62ページ、400～404ページ及び409～416ページ参照）。
- 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する（37～40ページ及び450～459ページ参照）。
- 立枯病対策には土壌pHを5.5～6.0に矯正する。
- 野菜跡地など残存窒素の多いほ場では、窒素施用量を0～1kg/10aとする。
- 堆肥は、窒素分の少ない完熟したものをを用いる。

## さつまいも（普通掘り栽培）

- 1 対象地域 北総地域  
 2 土 壌 火山灰土  
 3 栽植密度 2,800～3,700 本/10a  
 4 目標収量 3,000kg/10a  
 5 栽培型と主な作業

| 月旬<br>品種                  | 1                   | 2            | 3           | 4        | 5                      | 6   | 7   | 8   | 9        | 10        | 11                 | 12  |
|---------------------------|---------------------|--------------|-------------|----------|------------------------|-----|-----|-----|----------|-----------|--------------------|-----|
|                           | 上中下                 | 上中下          | 上中下         | 上中下      | 上中下                    | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下      | 上中下       | 上中下                | 上中下 |
| ベニアズマ<br>べにはるか<br>高系 14 号 | (ポット苗)<br><br>(種イモ) |              |             |          |                        |     |     |     |          |           |                    |     |
| 施肥                        |                     |              |             |          | ●                      |     |     |     |          |           |                    |     |
| 主要作業名                     |                     | ポット<br>苗育苗開始 | 種イモ<br>育苗開始 | 土壌<br>消毒 | 基植<br>え付け<br>肥・<br>マルチ |     |     |     | 収穫<br>始め | 収穫<br>終わり | 貯蔵<br>(11月～<br>4月) |     |

### 6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 |      | 窒素  | りん酸 | 加里 | 対応        |
|------|------|-----|-----|----|-----------|
| 基肥   | 5月上旬 | 3～5 | 10  | 10 | 低度化成、有機配合 |
| 追肥   |      | —   | —   | —  |           |
| 計    |      | 3～5 | 10  | 10 |           |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する（32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照）。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する（14 ページ参照）。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する（63～78 ページ及び 401～404 ページ参照）。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する（20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照）。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する（37～40 ページ及び 450～459 ページ参照）。
- (6) 立枯病対策には土壌 pH を 5.5～6.0 に矯正する。
- (7) 野菜跡地など残存窒素の多い場合は、窒素施用量を 0～1 kg/10a とする。
- (8) 堆肥は、窒素分の少ない完熟したものをを用いる。

## ばれいしょ (マルチ栽培)

- 1 対象地域 北総地域  
 2 土 壌 火山灰土  
 3 栽植密度 3,700~4,700 本/10a  
 4 目標収量 2,500kg/10a  
 5 栽培型と主な作業

|       |         |     |     |         |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-------|---------|-----|-----|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|       | 月旬      | 1   | 2   | 3       | 4   | 5   | 6   | 7   | 8   | 9   | 10  | 11  | 12  |
| 栽培型   |         | 上中下 | 上中下 | 上中下     | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| マルチ栽培 | ○—————□ |     |     |         |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
| 施肥    |         |     | ●   |         |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
| 主要作業名 |         |     | 基肥  | マルチ・植付け | 芽かき |     | 収穫  |     |     |     |     |     |     |

### 6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 |      | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応        |
|------|------|----|-----|----|-----------|
| 基肥   | 2月下旬 | 15 | 15  | 15 | 低度化成、有機配合 |
| 追肥   |      | —  | —   | —  |           |
| 計    |      | 15 | 15  | 15 |           |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32~44 ページ、47~51 ページ及び 417~424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63~78 ページ及び 401~404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20~24 ページ、52~62 ページ、400~404 ページ及び 409~416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37~40 ページ及び 450~459 ページ参照)。
- (6) そうか病・亀の甲症対策には土壌 pH を 5.5~6.0 に矯正する。
- (7) 野菜跡地など残存窒素の多いほ場では、窒素施用量を 20~30% 減らす。



## 大 豆 (転換畑)

- 1 対象地域 県内全域  
 2 土 壌 全土壌  
 3 栽植密度 7,000~15,000 本/10a  
 4 目標収量 300kg/10a  
 5 栽培型と主な作業

| 月旬    | 1   | 2   | 3   | 4   | 5   | 6        | 7   | 8      | 9   | 10     | 11  | 12  |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|----------|-----|--------|-----|--------|-----|-----|
|       | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下      | 上中下 | 上中下    | 上中下 | 上中下    | 上中下 | 上中下 |
| タチナガハ |     |     |     |     |     |          |     |        |     |        |     |     |
| サチユタカ |     |     |     |     |     |          |     |        |     |        |     |     |
| フクユタカ |     |     |     |     |     |          |     |        |     |        |     |     |
| 施肥    |     |     |     |     |     | ●        |     | (●)    |     |        |     |     |
| 主要作業名 |     |     |     |     |     | 基播<br>肥種 |     | 追<br>肥 |     | 収<br>穫 |     |     |

### 6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 |               | 窒素            | りん酸 | 加里 | 対 応  |
|------|---------------|---------------|-----|----|------|
| 基 肥  | 6月上旬<br>～7月上旬 | 1～3           | 10  | 10 | 低度化成 |
| 追 肥  | 8月中旬<br>～9月上旬 | (4～5)         | —   | —  | 単肥   |
| 計    |               | 1～3<br>(+4～5) | 10  | 10 |      |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 転換初年目は、根粒菌を接種する。
- (7) 生育の状態により、開花期の追肥を考慮する (146 ページ参照)
- (8) 土壌 pH を 6.0～6.5 に矯正する。

## 落 花 生 (マルチ栽培)

- 1 対象地域 県内全域  
 2 土 壤 全土壌  
 3 栽植密度 5,000～5,500 株/10a  
 4 目標収量 千葉半立 300kg/10a、ナカテユタカ・千葉P114号 400kg/10a  
 5 栽培型と主な作業

| 品種      | 月旬   | 4                           | 5   | 6      | 7                  | 8   | 9   | 10     | 11  | 12  | 1   | 2   | 3   |
|---------|------|-----------------------------|-----|--------|--------------------|-----|-----|--------|-----|-----|-----|-----|-----|
|         |      | 上中下                         | 上中下 | 上中下    | 上中下                | 上中下 | 上中下 | 上中下    | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| 千葉半立    |      |                             | ○—○ | —————  |                    |     |     | □      |     |     |     |     |     |
| ナカテユタカ  |      |                             | ○—○ | —————  |                    |     |     | □      |     |     |     |     |     |
| 千葉P114号 |      |                             | ○—○ | —————  |                    |     |     | □      |     |     |     |     |     |
| 施肥      |      | ●                           |     |        |                    |     |     |        |     |     |     |     |     |
| 主要作業名   | 土壌消毒 | 耕<br>マルチ<br>んち・基<br>播<br>肥種 |     | 中<br>耕 | マルチ<br>除去・中<br>耕培土 |     |     | 収<br>穫 |     |     |     |     |     |

### 6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 |               | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応                        |
|------|---------------|----|-----|----|---------------------------|
| 基肥   | 5月上旬<br>～6月中旬 | 3  | 10  | 10 | 低度化成、有機配合<br>苦土石灰 40～60kg |
| 追肥   |               | —  | —   | —  |                           |
| 計    |               | 3  | 10  | 10 |                           |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 6.0～6.5 に矯正する。
- (7) 「千葉半立」、「千葉P114号」を野菜跡地で栽培する場合は、窒素施用量を 20～30%減らす。
- (8) 砂質土では、窒素施用量を 20～30%増やす。
- (9) 石灰を基肥に施用しなかった場合は、開花期に施用する。

## 落花生(転換畑)

- 1 対象地域 県内全域  
 2 土壌 全土壌  
 3 栽植密度 5,000～5,500 株/10a  
 4 目標収量 千葉半立 240kg/10a、ナカテユタカ・千葉P114号 320kg/10a  
 5 栽培型と主な作業

| 品種      | 月旬 | 4   | 5   | 6      | 7  | 8   | 9      | 10  | 11  | 12  | 1   | 2   | 3   |
|---------|----|-----|---|--------|--|-----|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|         |    | 上中下 | 上中下   | 上中下    | 上中下  | 上中下 | 上中下    | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| 千葉半立    |    |     | ○—○   | —————  |  |     |        | □   |     |     |     |     |     |
| ナカテユタカ  |    |     | ○—○   | —————  |  |     |        | □   |     |     |     |     |     |
| 千葉P114号 |    |     | ○—○   | —————  |  |     |        | □   |     |     |     |     |     |
| 施肥      |    |     | ●   |        |  |     |        |     |     |     |     |     |     |
| 主要作業名   |    |     | 耕マ<br>う<br>ル<br>ん<br>チ<br>・<br>基<br>播<br>肥<br>種 | 中<br>耕 | マ<br>ル<br>チ<br>除<br>去<br>・<br>中<br>耕<br>培<br>土 |     | 収<br>穫 |     |     |     |     |     |     |

### 6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 |               | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応                        |
|------|---------------|----|-----|----|---------------------------|
| 基肥   | 5月上旬<br>～6月中旬 | 3  | 10  | 10 | 低度化成、有機配合<br>苦土石灰 40～60kg |
| 追肥   |               | —  | —   | —  |                           |
| 計    |               | 3  | 10  | 10 |                           |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する(32～44 ページ、47～51 ページ及び417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する(14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する(63～78 ページ及び401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する(20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する(37～40 ページ及び450～459 ページ参照)。
- (6) 湿害に弱いので、排水の良いほ場で栽培する。
- (7) 土壌pHを6.0～6.5に矯正する。
- (8) 転換初年目は地力窒素が発現しやすいので、有機物が多くかつ乾きやすいほ場では窒素施用量を20～30%減らす。

## ゆで落花生（郷の香）

- 1 対象地域 県内全域  
 2 土壌 全土壌  
 3 栽植密度 5,000～6,000 株/10a  
 4 目標収量 トンネルマルチ栽培 500kg/10a、べたがけマルチ・マルチ栽培 600kg/10a  
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型     | 月旬          |   |            |            |                |   |   |       |    |    |   |   |
|---------|-------------|---|------------|------------|----------------|---|---|-------|----|----|---|---|
|         | 3           | 4 | 5          | 6          | 7              | 8 | 9 | 10    | 11 | 12 | 1 | 2 |
| トンネルマルチ |             |   |            |            |                |   |   |       |    |    |   |   |
| べたがけマルチ |             |   |            |            |                |   |   |       |    |    |   |   |
| マルチ     |             |   |            |            |                |   |   |       |    |    |   |   |
| 施肥      | ●           |   |            |            |                |   |   |       |    |    |   |   |
| 主要作業名   | 耕うん・マルチ・基肥種 |   | トンネル・マルチ除去 | べたがけ・マルチ除去 | マルチ始め<br>マルチ除去 |   |   | 収穫終わり |    |    |   |   |

### 6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 |  | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応                        |
|------|--|----|-----|----|---------------------------|
| 基肥   | トンネルマルチ<br>3月中～<br>4月上旬                  | 3  | 10  | 10 | 低度化成、有機配合<br>苦土石灰 40～60kg |
|      | べたがけマルチ<br>4月中～下旬<br>マルチ<br>5月上～<br>6月下旬 |    |     |    |                           |
| 追肥   |  | —  | —   | —  |                           |
| 計    |  | 3  | 10  | 10 |                           |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する（32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照）。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する（14 ページ参照）。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する（63～78 ページ及び 401～404 ページ参照）。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する（20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照）。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する（37～40 ページ及び 450～459 ページ参照）。
- (6) 土壌 pH を 6.0～6.5 に矯正する。
- (7) 砂質土では、窒素施用量を 20～30% 増やす。
- (8) 石灰を基肥に施用しなかった場合は、開花期に施用する。

## ゆで落花生（おおまさり）

- 1 対象地域 県内全域  
 2 土壌 全土壌  
 3 栽植密度 2,500～3,000 株/10a  
 4 目標収量 600kg/10a  
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型     | 月旬      |     |            |     |      |     |       |     |     |     |     |     |
|---------|---------|-----|------------|-----|------|-----|-------|-----|-----|-----|-----|-----|
|         | 4       | 5   | 6          | 7   | 8    | 9   | 10    | 11  | 12  | 1   | 2   | 3   |
|         | 上中下     | 上中下 | 上中下        | 上中下 | 上中下  | 上中下 | 上中下   | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| べたがけマルチ |         |     |            |     |      |     |       |     |     |     |     |     |
| マルチ     |         |     |            |     |      |     |       |     |     |     |     |     |
| 施肥      | ●       |     |            |     |      |     |       |     |     |     |     |     |
| 主要作業名   | 耕マルチ・播種 |     | べたがけ・マルチ除去 |     | 収穫始め |     | 収穫終わり |     |     |     |     |     |

### 6 施肥基準

(kg/10a)

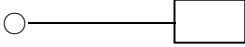
| 施用時期 |                   | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応                        |
|------|-------------------|----|-----|----|---------------------------|
| 基肥   | べたがけマルチ<br>4月中～下旬 | 3  | 10  | 10 | 低度化成、有機配合<br>苦土石灰 40～60kg |
|      | マルチ<br>5月上～中旬     |    |     |    |                           |
| 追肥   |                   | —  | —   | —  |                           |
| 計    |                   | 3  | 10  | 10 |                           |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する（32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照）。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する（14 ページ参照）。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する（63～78 ページ及び 401～404 ページ参照）。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する（20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照）。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する（37～40 ページ及び 450～459 ページ参照）。
- (6) 土壌 pH を 6.0～6.5 に矯正する。
- (7) 野菜跡地で栽培する場合は、窒素施用量を 20～30% 減らす。
- (8) 石灰を基肥に施用しなかった場合は、開花期に施用する。

## そ ば (秋 そ ば)

- 1 対 象 地 域 県内全域  
 2 土 壌 火山灰土、河成壤質土  
 3 栽 植 密 度 100 本/m<sup>2</sup> (畝間 60~70cm)  
 120~140 本/m<sup>2</sup> (畝間 30cm: ドリル播、散播)  
 4 目 標 収 量 120kg/10a  
 5 栽培型と主な作業

|   |    |     |     |     |     |                          |                    |                    |                    |     |     |     |     |
|---|----|-----|-----|-----|-----|--------------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-----|-----|-----|-----|
| 栽培型   | 月旬 | 4   | 5   | 6   | 7   | 8                        | 9                  | 10                 | 11                 | 12  | 1   | 2   | 3   |
|   |    | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下                      | 上中下                | 上中下                | 上中下                | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
|  |    |     |     |     |     |                          |                    |                    |                    |     |     |     |     |
| 施 肥   |    |     |     |     |     | ●                        |                    |                    |                    |     |     |     |     |
| 主 要 作 業 名   |    |     |     |     |     | 耕 播<br>う ん 種<br>・ 基<br>肥 | 中<br>耕<br>・ 培<br>土 | 収<br>穫<br>・ 乾<br>燥 | 脱<br>穀<br>・ 調<br>製 |     |     |     |     |

### 6 施 肥 基 準 (kg/10a)

| 施 用 時 期 |         | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対 応       |
|---------|---------|----|-----|----|-----------|
| 基 肥     | 8 月 中 旬 | 2  | 6   | 5  | 低度化成、有機配合 |
| 追 肥     |         | —  | —   | —  |           |
| 計       |         | 2  | 6   | 5  |           |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32~44 ページ、47~51 ページ及び 417~424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63~78 ページ及び 401~404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20~24 ページ、52~62 ページ、400~404 ページ及び 409~416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37~40 ページ及び 450~459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 5.5~6.0 に矯正する。
- (7) 播種溝施肥をしない。
- (8) そばは窒素に対して敏感に反応するため、窒素を入れすぎると倒伏しやすいので注意する。
- (9) 湿害に弱いので必要に応じて作付前に排水対策を行うこと。

## 茶 (幼木園)

- 1 対象地域 県内全域  
 2 土 壌 火山灰土  
 3 栽植密度 1,500本/10a  
 4 目標収量 1,500kg/10a (成木園時)  
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型   | 月旬  |                    |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-------|-----|--------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|       | 1   | 2                  | 3   | 4   | 5   | 6   | 7   | 8   | 9   | 10  | 11  | 12  |
|       | 上中下 | 上中下                | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| 幼木園   | ◎   |                    |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
| 施肥    |     | ●                  |     |     | ●   | ●   | ●   |     | ●   |     |     |     |
| 主要作業名 |     | 深耕・整地<br>植溝掘り・土壌改良 | 定植  | 除草  | 春肥  | 夏肥  | 除草  | 夏肥  | 除草  | 秋肥  | 除草  |     |

### 6 施肥基準

(1) 初年目

(kg/10a)

| 施用時期 |      | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応      |
|------|------|----|-----|----|---------|
| 春肥   | 5月上旬 | 2  | 1   | 1  | 化成、有機配合 |
| 夏肥   | 6月上旬 | 2  | 1   | 1  | 化成、有機配合 |
|      | 7月上旬 | 2  | 1   | 1  | 化成、有機配合 |
| 秋肥   | 9月中旬 | 3  | 2   | 2  | 化成、有機配合 |
| 計    |      | 9  | 5   | 5  |         |

(2) 2年目以降の年次別施肥量

| 樹齢                 | 2年生 | 3年生 | 4年生 | 5年生 | 6年生 | 7年生 |
|--------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 成木園の施肥基準に対する割合 (%) | 50  | 60  | 70  | 80  | 90  | 100 |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 5.0～5.5 に矯正する。
- (7) 土壌改良は、深さ 30～40cm の植溝を掘り、そこに堆肥・苦土石灰等の資材を施用して土とよく混和する。
- (8) 樹勢に応じて追肥を増減する。

## 茶 (成木園)

- 1 対象地域 県内全域  
 2 土 壌 火山灰土  
 3 栽植密度 1,500本/10a  
 4 目標収量 1,500kg/10a  
 5 栽培型と主な作業

|       |    |     |        |         |     |        |     |     |     |     |      |     |     |
|-------|----|-----|--------|---------|-----|--------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| 栽培型   | 月旬 | 1   | 2      | 3       | 4   | 5      | 6   | 7   | 8   | 9   | 10   | 11  | 12  |
|       |    | 上中下 | 上中下    | 上中下     | 上中下 | 上中下    | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下  | 上中下 | 上中下 |
| 成木園   |    |     |        |         |     |        |     |     |     |     |      |     |     |
| 施肥    |    |     | ●      | ●       |     | ●      | ●   |     | ●   |     |      |     |     |
| 主要作業名 |    |     | 春肥・せん定 | 芽出し肥・除草 | 摘採  | 夏肥・せん定 | 夏摘採 | 夏肥  | 除草  | 除草  | 深秋耕肥 | 除草  |     |

### 6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 |      | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応   |
|------|------|----|-----|----|------|
| 春肥   | 3月中旬 | 12 | 12  | 8  | 有機配合 |
| 芽出し肥 | 4月上旬 | 8  | —   | —  | 単肥   |
| 夏肥   | 6月上旬 | 8  | —   | —  | 単肥   |
|      | 7月中旬 | 8  | —   | —  | 単肥   |
| 秋肥   | 9月中旬 | 12 | 12  | 8  | 有機配合 |
| 計    |      | 48 | 24  | 16 |      |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 5.0～5.5 に矯正する。
- (7) 堆肥、苦土石灰等は秋に施用するが、秋肥の施用と 2 週間以上の間隔を空け、土とよく混和する。
- (8) 窒素施用量は、1 回に 15kg/10a を限度とする。
- (9) 3 月春肥のうち、窒素の半量近くを 4 月上旬の芽出し肥とすると 1 番茶の品質が向上する。
- (10) 畝間全面に施し土壌とよく混和する。



# 葉 た ば こ

- 1 対象地域** 県内全域  
**2 土 壌** 海成砂質土、火山灰土  
**3 栽植密度** 1,932~2,070 本/10a  
**4 目標収量** 268kg/10a  
**5 栽培型と主な作業**

|       |    |          |                   |        |      |     |             |     |       |         |       |                |     |      |
|-------|----|----------|-------------------|--------|------|-----|-------------|-----|-------|---------|-------|----------------|-----|------|
|       | 月旬 | 1        | 2                 | 3      | 4    | 5   | 6           | 7   | 8     | 9       | 10    | 11             | 12  |      |
| 栽培型   |    | 上中下      | 上中下               | 上中下    | 上中下  | 上中下 | 上中下         | 上中下 | 上中下   | 上中下     | 上中下   | 上中下            | 上中下 |      |
|       |    |          |                   |        |      |     |             |     |       |         |       |                |     |      |
| 施 肥   |    | ●        |                   |        | ●    |     |             |     |       |         |       |                |     |      |
| 主要作業名 |    | 播基<br>種肥 | 排水溝等設置<br>マルチ・植付け | マルチカット | 分入れ肥 | 土寄せ | わき芽<br>収穫始め | 心止め | わき芽処理 | 全掻き収穫開始 | 収穫終わり | 残幹処理<br>緑肥作物播種 | 耕うん | 土壌消毒 |

## 6 施 肥 基 準 (kg/10a)

| 施用時期  |     | 窒素    | りん酸   | 加里    | 対 応   |      |
|-------|-----|-------|-------|-------|-------|------|
| 海成砂質土 | 基 肥 | 2 月中旬 | 10~12 | 20~22 | 21~26 | 有機化成 |
|       | 分 肥 | 4 月下旬 | 1~2   | 2~3   | 2~4   |      |
|       | 計   |       | 11~14 | 22~25 | 23~30 |      |
| 火山灰土  | 基 肥 | 2 月中旬 | 6~9   | 21~30 | 21~30 | 有機化成 |
|       | 分 肥 |       | —     | —     | —     |      |
|       | 計   |       | 6~9   | 21~30 | 21~30 |      |

## 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する(63~78ページ及び401~404ページ参照)。
- (2) 土壌のpHを5.5~6.0に矯正する。
- (3) 未熟堆肥及び塩素を含む肥料は、品質を低下させるので施用しない。
- (4) 土壌消毒地は状況に応じて減肥する(10~20%)
- (5) 地下水の高い地域は大高畝(40cm以上)とし、全量基肥施用とする。
- (6) 潜在窒素が多い地域では緑肥作物等を作付けし、土壌クリーニング(窒素分の除去)する。
- (7) 良質堆肥の施用に努める。不足する場合は代替堆肥を施用する。

## 桑 園 (稚 蚕 用)

- 1 対 象 地 域 県内全域  
 2 土 壌 火山灰土、海成砂質土  
 3 栽 植 密 度 1,000~1,200 本/10a  
 4 目 標 収 量 1,000kg/10a (全芽量)  
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型       | 月旬  |     |                 |     |     |                 |     |                 |         |         |     |                 |         |
|-----------|-----|-----|-----------------|-----|-----|-----------------|-----|-----------------|---------|---------|-----|-----------------|---------|
|           | 1   | 2   | 3               | 4   | 5   | 6               | 7   | 8               | 9       | 10      | 11  | 12              |         |
|           | 上中下 | 上中下 | 上中下             | 上中下 | 上中下 | 上中下             | 上中下 | 上中下             | 上中下     | 上中下     | 上中下 | 上中下             |         |
| 全芽育成A法    |     | ✕   |                 |     |     |                 |     |                 |         |         |     |                 |         |
| 全芽育成B法    |     | ✕   |                 |     |     |                 |     |                 |         |         |     |                 |         |
| 全芽育成C法    |     | ✕   |                 |     |     |                 |     |                 |         |         |     |                 |         |
| 施 肥       |     |     | ●●●             |     | ●●  |                 | ●●● |                 |         |         | ●●  | ●●●             |         |
| 主 要 作 業 名 |     | 整 枝 | 基 肥<br>・<br>中 耕 | 除 草 | 収 穫 | 追 肥<br>・<br>中 耕 | 収 穫 | 追 肥<br>・<br>除 草 | 収 除 穫 草 | 収 除 穫 草 |     | 追 肥<br>・<br>深 耕 | 土 壌 改 良 |

### 6 施 肥 基 準

(kg/10a)

|        |     | 施 用 時 期    | 窒 素 | りん酸 | 加里 | 対 応  |
|--------|-----|------------|-----|-----|----|------|
| 全芽育成A法 | 基 肥 | 3月中旬 (春肥)  | 10  | 7   | 8  | 有機配合 |
|        | 追 肥 | 5月下旬 (夏肥)  | 6   | 4   | 5  | 有機配合 |
|        |     | 7月上旬       | 4   | 3   | 4  | 有機配合 |
|        |     | 11月下旬 (冬肥) | —   | 6   | 3  | 有機配合 |
| 計      |     |            | 20  | 20  | 20 |      |
| 全芽育成B法 | 基 肥 | 3月中旬 (春肥)  | 12  | 12  | 12 | 有機配合 |
|        | 追 肥 | 7月上旬       | 8   | 8   | 8  | 有機配合 |
|        | 計   |            |     | 20  | 20 | 20   |
| 全芽育成C法 | 基 肥 | 3月中旬 (春肥)  | 10  | 7   | 8  | 有機配合 |
|        | 追 肥 | 5月下旬 (夏肥)  | 6   | 4   | 5  | 有機配合 |
|        |     | 7月上旬       | 4   | 3   | 4  | 有機配合 |
|        |     | 11月下旬 (冬肥) | —   | 6   | 3  | 有機配合 |
| 計      |     |            | 20  | 20  | 20 |      |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32~44 ページ、47~51 ページ及び 417~424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63~78 ページ及び 401~404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20~24 ページ、52~62 ページ、400~404 ページ及び 409~416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37~40 ページ及び 450~459 ページ参照)。
- (6) 土壌の pH を 6.0~6.5 に矯正する。
- (7) 土壌改良については、148 ページを参照する。

## 桑 園 (普通植)

- 1 対象地域 県内全域  
 2 土 壌 火山灰土、海成砂質土  
 3 栽植密度 833～1,111本/10a  
 4 目標収量 2,800kg/10a (繭120kg/10a)  
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型     | 月旬  |     |     |     |     |          |       |     |     |     |     |         |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|----------|-------|-----|-----|-----|-----|---------|
|         | 1   | 2   | 3   | 4   | 5   | 6        | 7     | 8   | 9   | 10  | 11  | 12      |
|         | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下      | 上中下   | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下     |
| 夏切法     |     |     |     |     |     |          |       |     |     |     |     |         |
| 春切法(夏晩) |     |     |     |     |     |          |       |     |     |     |     |         |
| 春切法(初秋) |     |     |     |     |     |          |       |     |     |     |     |         |
| 施肥      |     |     | ●●● |     |     | ●●       | ●     |     |     |     |     | ●●●     |
| 主要作業名   |     | 整枝  | 基肥  | 除草  | 収穫  | 追肥・中耕・除草 | 収穫・中耕 | 収穫  | 中耕  | 収穫  | 収穫  | 土壌改良・深耕 |

### 6 施肥基準

(kg/10a)

|         |      | 施用時期     | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応   |
|---------|------|----------|----|-----|----|------|
| 夏切法     | 土壌改良 | 12月中旬    | —  | 3   | —  | 単肥   |
|         | 基肥   | 3月中旬(春肥) | 15 | 6   | 6  | 有機配合 |
|         | 追肥   | 6月上旬(夏肥) | 15 | 6   | 6  | 有機配合 |
|         | 計    |          |    | 30  | 15 | 12   |
| 春切法(夏晩) | 土壌改良 | 12月中旬    | —  | 3   | —  | 単肥   |
|         | 基肥   | 3月中旬(春肥) | 18 | 7   | 7  | 有機配合 |
|         | 追肥   | 7月下旬     | 12 | 5   | 5  | 有機配合 |
|         | 計    |          |    | 30  | 15 | 12   |
| 春切法(初秋) | 土壌改良 | 12月中旬    | —  | 3   | —  | 単肥   |
|         | 基肥   | 3月中旬(春肥) | 15 | 6   | 6  | 有機配合 |
|         | 追肥   | 6月上旬(夏肥) | 15 | 6   | 6  | 有機配合 |
|         | 計    |          |    | 30  | 15 | 12   |

### 7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する(32～44ページ、47～51ページ及び417～424ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する(14ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する(63～78ページ及び401～404ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する(20～24ページ、52～62ページ、400～404ページ及び409～416ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する(37～40ページ及び450～459ページ参照)。
- (6) 土壌のpHを6.0～6.5に矯正する。
- (7) 植付け当年の施肥量は施肥基準の70%、2年目は80%とし、それぞれ春肥と夏肥に半量ずつ株元に施用する。